

墨竹図と五山文学 ——蘇東坡の詩を例に

(鄭州大学外国語与国際関係学院/アジア研究院 王連旺)

はじめに

中国絵画史上、墨竹図が一ジャンルとして成立するのは、山水画・人物画より遅れる。北宋末期の『宣和画譜』に至って初めて「墨竹門」が設けられた。そこには、五代・北宋の画家十二人、及び、その墨竹図百四十八点が収められるのみである。その「墨竹叙論」(『宣和画譜』卷二十二)に次のように言う。

画墨竹与夫小景自五代至本朝才得十二人、而五代独得李頗、本朝魏端献王頎、士人文同輩。故知不以着色専求形似者、世罕其人。(墨竹と夫の小景とを画くもの五代より本朝に至るまで才かに十二人を得るのみ、而も五代は独だ李頗を得るのみ、本朝は魏端献王頎、士人文同の輩のみ。故に着色を以て専ら形似を求めざる者、世に其の人罕なるを知る)

この中、もっとも重要な画家は文同(1018-1079)である。文同、字は与可、世に文湖州と呼ばれ、墨竹の画法を革新して湖州画派を開いた。また、蘇東坡の従兄で、墨竹の画法を蘇東坡に伝えた。

『宋史』文同伝に、「同又善画竹、初不自貴重、四方之人持縑素請者、足相躡於門。(同又た善く竹を画く、初め自ら貴重とせず。四方の人縑素を持って請う者、足門に相躡む)」とあり、当時、彼の墨竹図が貴ばれていたことが分かる。特に、蘇東坡は「跋文與可墨竹」・「書文與可墨竹」・「題文與可墨竹」・「書晁補之所藏與可畫竹三首」といった画賛・題画詩を文同の「墨竹図」のために作るほどであった。

本発表は、蘇東坡の詩と日本中世五山僧らの遺した東坡詩抄物(注釈書)を手がかりとして、「墨竹図」が日本に伝えられた経緯を明らかにし、且つ、五山文学に与えた影響を考察したい。

一、中世将軍の蔵画目録からみる「墨竹図」

近年、浙江大学研究チームは中国国内外における宋代の絵画を網羅し、『宋画全集』として出版した。その中、日本所蔵の宋画は174点あり、上海博物館(72点)と遼寧省博物館(39点)の所蔵総数を超えるほどである。これらの宋画は必ずしも近代以降日本に流出したものではなく、唐物崇拜の風潮が興った鎌倉・室町時代にはすでに数多くの宋元画が伝わっていた。

資料A:『仏日庵公物目録』

- ・北条時宗が開山した鎌倉円覚寺の塔頭仏日庵の什宝目録、1320年の成書。
- ・頂相、絵画、墨跡、法衣、陶磁器、漆器などを著録
- ・宋元画に関する最初の文献として貴重

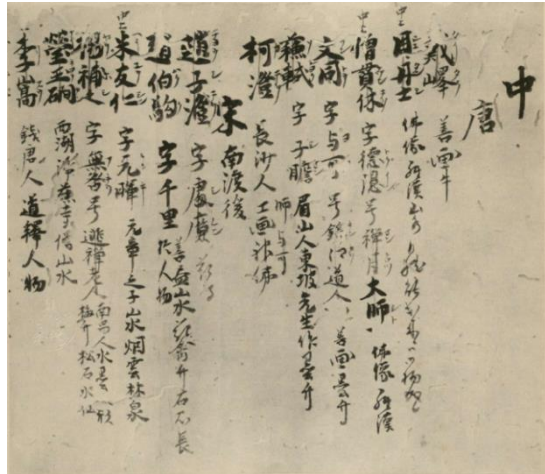
※墨竹図が記されていない。

資料 B：『君台観左右帳記』

・室町時代の座敷飾りの秘伝書。足利義政の同朋衆能阿弥の著と伝えられる。

・宋元時代を中心とする画家約 150 人を収め、年代順に上、中、下の品等に分ける。

・「中品」に文同、蘇軾の名が見える。



資料 C：『御物御画目録』

- ・足利義満以来の代々の将軍家所蔵の中国絵画を記載する。
- ・公府所蔵の中国絵画約 90 点をおさめる。
- ・墨竹図が著録されていない。

『仏日庵公物目録』成書（1320 年）前後の時期、墨竹図がまだ日本に伝わっていない。『君台観左右帳記』は将軍の所蔵品に沿って作ったものではないため、文同、蘇軾の名が記されていることだけでは、墨竹図の実物が日本に伝わったとは言えない。『御物御画目録』には、墨竹図が著録されていないことから、墨竹図は将軍の文庫に入っていないことが分かる。

二、東坡詩抄物に記録される墨竹図

資料 D：虎關師練（1278–1346）「除夜並序」詩（『済北集』卷三）

『東坡集』曰、歳晩相与饋為饋歳、酒食相邀呼為別歳、除夜不眠為守歳、蜀之風俗如是。因而有三詩各八韻、予嫌其繁冗焉、今夜燈下包三事而賦一絶云。

これによれば、『東坡集』は虎關師練の時代にすでに日本に伝わった。文同「墨竹図」は蘇東坡の詩によって五山禅僧の間で知られた可能性が高い。

資料 E：蘇東坡「書文与可墨竹並敘」（笑雲青三編、中田祝夫整理『四河入海』、勉誠社、第 215–216 頁）

亡友文與可有四絶、詩一、楚詞二、草書三、画四。与可嘗云、世無知我者、惟子瞻一見、識吾妙处。既沒七年、睹其遺跡、而作是詩。

筆与子皆逝

詩今誰為新

空遺運斤質

卻吊斷弦人

・万里集九『天下白』の注釈

某謂此墨竹真跡本朝之南舟載之歸、在三條殿下之第、春阿以三十緡換之。欲獻相府、或人云「既沒七年」之四字似可忌也、故不獻而秘之。春阿有弟諱曰真厚、字曰柳溪、前陰涼松泉老人之籌室、而福足之僧也、司藏鑰於万年而秉拂、阿兄春以此墨竹為賀。某實見之、故記來由。

・春阿は 15 世紀中期の人。

資料 F：『陰涼軒日録』（仏書刊行會、1912 年、第 234-235 頁）

長祿三年（1459）十一月廿七日條：墨印肉可添改之由、春阿被仰出也。

長祿三年（1459）十一月廿八日條：觀音殿本尊早晨被移也、小持佛堂本尊阿彌陀之像、之前廿七日被移也、春阿奉之。……今夜御書籍被召也、春阿奉之。

長祿三年（1459）十一月廿九日條：前謂御書籍被召者、今夜之事也。南藩絹並南藩絹之御掛落被出之、以此掛落本縫之、可獻之由。春阿被仰出、即召等持寺建種首座命之。

長祿三年（1459）十一月晦日條：前日御掛落之南藩絹之餘分、向春阿渡之。

遣明使随員と推測される南舟は中国で蘇東坡「書文与可墨竹並敘」が書かれた文同「墨竹図」を日本に将来した。同朋衆の春阿はこれを購入し、將軍に献上しようとしたが、ある人が、蘇東坡の詩序に「既に没すること七年」と書いてあるので、不祥なものだと忠告した。春阿はその意見を聞き、墨竹図が献上されることはなかった。後、春阿は弟の真厚が相国寺鹿院蔭涼の文籍管理の職に就く際、墨竹図を真厚或いは相国寺に贈った。万里集九はこれを実見して蘇東坡の詩に注釈した。これによれば、15 世紀中頃、文同「墨竹図」は日本に伝わったことが分かる。

三、五山文学における墨竹図

將軍家に収蔵される宋元画は、唐物の珍品として重要視されていた。極有数の宋元画に「天山」「道有」「雜華室印」といった將軍の鑑賞印が捺されたが、その上に画賛・題画詩を書き付けることはまずない。これが日本の画僧の絵画になると、大いに異なってくる。五山禅僧は日本の画僧が画いた水墨画の余白に詩歌を数多く題している。これは詩画軸と呼ばれる。

資料 G：「墨竹」詩（鉄庵道生（1262-1331）『純鉄集』）

急雪打難死、疾風吹愈閑。

不知千載後、誰斫作漁竿。

煙葉梳風冷、寒梢拂月清。
筆端三昧力、深夜聽秋聲。

初期五山文学の作品集鉄庵道生『純鉄集』所収の「墨竹」詩は、14 世紀前後に作った墨竹図の題画詩である。詩中に「急雪」「秋声」とあることから、これは、「四季墨竹図」の冬景と秋色に題したものであろう。こうなると、14 世紀前後、墨竹図またはその画面構成情報などがすでに日本に伝わり、それが五山文学を創作する契機となったと言えそうである。

資料 H：義堂周信の題画詩にみる墨竹図

灑墨肖形影、精神渾欲蜚。(墨竹六首 其の一)『空華集』卷十八
片楮才盈尺、新篁寫數竿。(墨竹六首 其の二)『空華集』卷十八
披図当盛暑、直欲濯清風。(墨竹六首 其の四)『空華集』卷十八
道人灑墨寫琅玕、苔色兼將濕未幹。(墨竹三首 其の一)『空華集』卷三
笑岩笑把秃毛錐、為竹伝真作笑姿。(墨竹三首 其の三)『空華集』卷三
多謝幻菴如幻筆、写真贈我兩三莖。(墨竹二首 其の一)『空華集』卷二
愛個画図生意足、春煙漠漠雨濛濛。(墨竹二首 其の一)『空華集』卷二
活写亭亭冰玉姿、多情好在晚晴時。(墨竹二首 其の二)『空華集』卷二

絶海中津とともに五山文学の双璧とされる義堂周信(1325—1388)は、墨竹図の題画詩を17 首ほど製作した。詩中には笑岩、幻菴といった日本中世画僧の名も見える。幻菴は中世日本水墨画家愚溪右慧である。すなわち、義堂周信の時代において、愚溪右慧、笑岩などの画僧がすでに日本で墨竹図を製作していたことになる。これは、文同「墨竹図」が日本に伝わった15 世紀中頃よりも早い。そして、義堂周信らの提唱によって、五山文学における墨竹を主題とする詩作は普遍化していった。

おわりに

中国五代に生まれた墨竹図は、文同・蘇東坡の開拓によって宋画・宋詩の重要な題材となった。14 世紀初期、蘇東坡・文同の「墨竹図」の盛名は日本に伝わり、五山の画僧愚溪右慧らが日本で墨竹図を画き始めた。15 世紀中頃、蘇東坡「書文与可墨竹並敘」が題された文同の墨竹図は日本に将来され、同朋衆春阿はそれを購入して相国寺で文籍管理の職に就く弟真厚に贈った。初期五山文学の作品に墨竹図の題画詩が現れ、とくに義堂周信の提唱によって、五山文学における墨竹を主題とする詩作が普遍化したのである。

本発表は中国国家社科基金一般項目“東亞視域下的日本‘東坡詩抄物’研究”(21BZW012)、教育部人文社科青年基金“蘇軾文学在日本的傳播与接受研究”(19YJC751042)の助成を受けたものです。